

# 書院祭祀に関する基礎的研究：近世台湾書院を中心として

簡，亦精

<https://hdl.handle.net/2324/1440983>

---

出版情報：九州大学，2013，博士（文学），課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

論文題目 書院祭祀に関する基礎的研究 ―近世台湾書院を中心として―

氏名 簡亦精

## 論文内容の要旨

本論文は、近世台湾書院を中心に、書院祭祀における儒教に立脚した伝統的な祭祀、及び道教的・土俗的信仰に由来する祭祀の受容の様態、さらには書院と関わり深い各時代の知識人が有していた思想・宗教上の特徴などを分析することによって、書院祭祀が有する地域的特質を解明し、あわせて地域的特質の比較検討によって書院祭祀の普遍的な特質を析出し、ひいては、東アジア共通の伝統的教養の実体の一端を捉えようとするものである。

本論文は、序論・本論・結論より構成されており、本論の第Ⅰ部は書院の歴史が、第Ⅱ部は書院の祭祀が中心テーマである。

序論では、本論文の目的、先行研究と研究史及び本論文の構成について述べる。書院には講学・蔵書・祭祀の三大要素が付与され、三者はそれぞれに補完するものであり、不可分のものであるが、主に前二者は学問教養を教授する役割を果たし、残る祭祀が倫理道德意識を涵養する機能を担う。この書院祭祀が担う倫理道德意識涵養の機能は、東アジアの伝統的教養の形成と不可分な関係にあると考えられる。従来の歴史学的アプローチによる先行研究では、講学と蔵書の問題にばかり関心が向けられ、書院祭祀の問題は不当に疎かにされてきた。そこで本論文では書院祭祀の問題を常に念頭に置いて、書院の歴史を再検討する。その上で、地方風習と文化背景等の諸問題を解析することによって、より全面的に書院祭祀の本質・意義を理解することを試みる。

第Ⅰ部では、まず書院の歴史を概観するため、唐代皇帝の創建した麗正書院・集賢書院から、清代台湾最大規模の海東書院・白沙書院までの書院に纏わる、今まで深く言及されなかった諸問題を中心に分析を行う。第一章「唐代の書院」は、従来軽視されていた『職官分紀』所引の『集賢注記』を再検討し、等閑にされがちだった「明福門外書院」に関わる問題を詳細に分析することによって、麗正書院・集賢書院について再検討する。第二章「宋代の書院」は、宋代知識人によって編纂された政書や類書を通して、知識人の抱いた正統的な書院観について考察を行い、特に書院の祭祀機能を大成した宋代において、理学者以外の知識人が書院機能（特に祭祀機能）に対して如何なる考えを持っていたかを検討する。第三章「元代の書院」は、異民族が如何にして漢民族固有の書院を摂取し、受容したかを考察する。具体的には朱子学を尊崇し古来の学校制度「廟学制」を採用した政策によって、官立学校と同様に扱われた書院祭祀の

展開に重点を置くことにする。第四章「明代の書院」は、書院が廃止・破壊される危機に瀕するに至った直接的原因は何であったかを究明する。主として各人の書院記の解読を通して、明代における書院の役割とは何かを明確にする。第五章「清代の書院」は、元と同じく異民族の統治者である清が、書院をどのように受容したのかを明らかにする。特に学術の動向や朝廷の政策と書院の性質や書院を取りまく環境の変化との関係を考察する。第六章「台湾の書院」は、近世台湾書院に関する形成・伝承・受容・変化の諸側面から中国大陆の書院との異同を検証する。具体的には台湾の代表的書院である海東書院（康熙時代に成立）と白沙書院（乾隆時代に成立）を取り上げ、台湾書院の位置づけを多角的に考察する。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で解明された書院の歴史的発展を踏まえながら、書院祭祀の発生と展開を具体的に解明していく。すなわち、書院祭祀の原型を究明するために両宋の祭祀について考察した第七章と、縁辺地域における書院祭祀の特徴を論じた第八章、台湾書院の祭祀対象を中心とする第九章、及び書院における文昌帝君祭祀と文昌閣を考究した第十章、という民間信仰と書院祭祀に関する四つの章によって構成される。第七章「両宋における書院祭祀の変化―祭祀空間と祭祀対象を中心に―」は、宋代における孔子祭祀と孔子の弟子の祭祀の問題、とりわけ孔子の脇で祭祀された弟子たちの変遷について詳細に検討する。具体的には岳麓書院と白鹿洞書院を主な研究対象として取り上げ、北宋書院と南宋書院の祭祀対象に関する類似点・相違点の有無を確認する。第八章「中国縁辺部における書院祭祀―台湾と朝鮮との書院の比較を通して―」は、台湾の書院祭祀に特徴的な道教的祭祀の原型を、書院建築と祭祀対象及び風水に代表される土俗的信仰との混淆の面から解明する。主として縁辺地域（朝鮮王朝・台湾）の書院に祀られる対象を相互に比較しながら、中国大陆との異同を考察し、台湾書院の有する特徴を明らかにする。第九章「台湾書院の祭祀活動について―祭祀の対象を中心に―」は、台湾の書院祭祀の対象に焦点を当てて考察を行う。具体的には文昌帝君のような道教祭神を祭祀するようになった経緯を分析し、台湾書院の祭祀対象を中心にして検討し、台湾書院の祭祀対象が多様性を持つ背景を解明する。第十章「書院祭祀と民間信仰について―文昌閣と文昌信仰を中心として―」は、土俗的信仰から国家的祭祀へと転化した文昌信仰を、知識人たちがその儒学的教養の中で葛藤しながらも受容していった過程を解明する。すなわち、民間信仰である文昌信仰と書院との関係を考証し、文昌閣・文昌神への崇拜はいつから書院祭祀に浸透したか、その経緯を究明する。

結論では、本論文の要旨と意義について述べる。まず各章の要旨と成果を述べ、次に文昌帝君信仰に象徴される台湾書院の祭祀のあり方を例に挙げ、大陸の書院祭祀や同じ縁辺地域の朝鮮の書院祭祀の辿った境遇との比較を通して、それが台湾独自でありながら、逆説的に書院祭祀の普遍的な特質の一端を露呈していることを述べる。さらに、書院祭祀の研究が、実は東アジア共通の伝統的教養形成という広範な研究の一環を為していることを論じて結びとする。